



## 第25回 木村奈保子の 音のまにまに

このところ、政治が危ない。呆れ果てるようなニュースだらけだ。なぜ、醜い権力争いに終始する彼らに2千万円以上の年収が国民の税金から支払われるのか？ なぜ、幸せをもたらす映画人や音楽人にもっと大きな価値を与えないのか？ そう思うのは、クリエイター、アーティストだけではないだろう。芸術家やプロの音楽家が、生活をするためのジレンマを抱えながら、アートを支えてきたのは、いつの世も変わらない。

### 政治家たちの“欲望”を描いたストーリー

この時期に、見てもらいたいアメリカのネット配信映画がある(昨年、日米同時配信され、いまはシリーズ4までDVDレンタルもできる)。

「ハウス・オブ・カード 野望の階段」は、90年に英国でテレビドラマ化されたものをアメリカで、ハリウッドの一流スターを配して制作された。

タイトルの“ハウス”というのは、もちろん犬の家のことではなく、ホワイトハウスのこと。主人公のケビン・スペイシーが、ホワイトハウス入りを目指す下院議員で、自分の出世を求めながら、さまざまな選挙になりふりかまわず、関わり利用して、のしあがっていく。

この映画が面白いのは、政治家の政策、信条などは一切無視して、出世のためならなんでもありの政治家たちによる、露骨な欲望のみを切り取って見せる、わかりやすいストーリー性。

その野心をひっさげるのは、主人公の政治家だけでなく、妻であるところも凄い。夫婦ともども……というところから、アメリカではクリントン夫妻が描かれているとも囁かれたが、私の視点では、そうでもない。ヒラリーは、少なくとも弁護士で、政治家でもある。夫の看板を利用しまくるというイメージでもない。

この作品の妻は、政治家の妻でしかないのに、自分の野心により、夫と駆け引きしながら、次第に自分の権力を求めていく。夫である政治家の野心ぶりは、人殺しも辞さない無謀ぶりだが、妻も不倫あり～の、失態あり～の、にものともせず、前へ前へと進んでいく。

完璧な野心カップルに、どんな感情が流れているのか、想像もできないくらい、怪しく、恐ろしい。この二人、どうもアメリカではなく、もっと身近に感じられるのは私だけではないだろう。

ちなみに妻役のロビン・ライトはショーン・ペンの元妻。マドンナが最も愛したというショーン・ペンを難なくゲットしたクール・ビューティーだ。キュートなショートヘアが似合うロビン・ライトは、この作品で自分の立ち位置を確認し、主人公のケビン・スペイシーと同額のギャラを要求した凄腕でもある。

ともかく、この作品を見ていたら、日常の政治家が何をどう考えて、動いているのか、なぜ、平気で嘘をついたり、しらじらしい態度がとれるのか、理解させるような説得力がある。多くの映画は、真実の誇張である。誇張の部分がエンタテインメントの役割でもある。

それにしても、エンタテインメントは、こんな人間の醜い部分にフォーカスしていても、役者の芸によって、魅力を醸し出すからいい。ケビン・スペイシーといえば、音楽好きで、ジャズのコンサートも行なうほどのヴォーカリスト。「Beyond the Sea 夢見るように歌えば」(2004年制作のアメリカ映画)で見せた自身の歌と洗練された身のこなし、おちゃめなキャラが忘れられない。

ハリウッドの一流スターと同じエンタテインメントな魅力を政治家に期待することは難しいが、やっぱり歳を重ねると、芸の素人は、顔に出る。芸がないのだから、魅力的な顔を作るのは、自身の信念や正義の行ないでしかない。政治家の表情を見ていると、妙にざわざわして、清らかな音楽が聴きたくなる。



NAHOK INFORMATION [www.nahok.com](http://www.nahok.com)

Fabric from  
Germany,  
Made in Japan

あなたのフルートをお洒落にガード

雨ニモマケズ  
風ニモマケズ  
暑さにも  
衝撃にも  
湿度にも マケナイ  
そんなサウンドバッグが  
私の音を守る。

